総合科学部と女性学

総合科学部
人間文化コース
稲田勝彦

女性学のカリキュラム

平成四年度に総合科学部に人間文化コースが発足して、「女性学」「女性学演習」「女性学特別演習」など、女性学という名称を冠した授業科目が開設された。

アメリカの大学では、すでに一九八〇年には、女性学のプログラムは約三百、コースは三万以上できていたといわれるが、日本の大学では、特に国立大学では、女性学という名称を持つ授業科目はいまだ少ないと思われる中で、これは画期的なことだといってよいだろう。

人間文化コースは、世界の諸文化を、比較と現代性という視点に立って学際的に研究、教育することを目的とするコースであるから、「女性学」という科目を設けることは、いわば必然であった。

総合科学部では、このほかにも「現代女性作家論」、「家族・ジェンダー論」、総合科目「女たちのネバー・エンディング・ストーリー」、あるいは社会科学研究科国際社会論の「フェミニズムとフェミニズム批評」など、女性学という名称こそ持たないけれども、女性学の範ちゅうに入れることのできる科目が開設されているし、また、社会学、地域学、文学、言語学、心理学等の分野において、ジェンダーの視点を取り入れた授業も相当行われている。

今や学生は、これら女性学関連の科目を履修すれば、かなりまとまった女性学の知識と経験を修得することができるようになったといってよく、現に、女性学にかかわる卒業論文や修士論文も現れている。

「女性学」の内容と意義

女性学とは、本来、今までの大学における伝統的な研究・教育・制度はすべて男性中心のものであったと規定し、女性あるいはジェンダーの視点に立って、あらゆる領域にわたってこれを見直し、新しい価値体系を持つ学問を構築することを目指すものであるから、単一の学問分野にかかわるものではない。従って、「女性学」という独立した授業科目を立てるということは、ある意味では矛盾であり、その講義を行うことには非常な困難が伴うことになる。

「女性学」担当者は、いきおい、「今、なぜ女性学か」という問題提起から、父権制の起源・存続・歴史的再生産の問題、フェミニズムの理論と運動の変遷などの基本的な問題、更に社会学、歴史学、経済学、法学・政治学、人類学、教育学、文学、言語学をはじめほとんどすべての学問領域にわたって、しかも日本と外国の両方に目を向けながら、講義しなければならないという義務感に駆られるし、また、学生もそれを期待するということになる。

一人の担当者がこのような講義を自他ともに満足のゆくように行うことは不可能だが、それでも「女性学」と銘打った科目を開設するのは、それが学生に男女の問題を真剣に考える機会を与え、彼らの〈意識高揚〉に大きく貢献するからである。実際、筆者が担当する女性学関連の授業でも、学生のレポートで「フェミニズムが単に男女の権利の平等だけを目指すものでないことがわかった」などという感想に出会うと、いささかの感慨がなくもない。

学問がますます特殊化、細分化されつつある現在、教師と学生双方が、みずからの切実な問題として受けとめつつ参加できる授業が求められているが、「女性学」はこれに応えることのできる大きな可能性を持った授業であるといってよい。

女性学と今後の課題

女性学は、「女性による、女性のための、女性についての学問である」といわれるように、本学の女性学も、基本的には女性教員が中心となって推進されるべきであろう。男性教員がこれに関係する場合は、不断の自己改革を心がけ、偏見を助長しないように細心の注意を払う必要がある。将来は、女性学がまとまったプログラムとして開設されることを期待したい。

PROFILE

（いなだ・かつひこ）
◇英語講座教授
◇研究分野はアメリカの詩、特にエミリ・ディキンスンを中心とする女性詩人研究および批評
◇担当授業科目は「英語」「女性学演習」「現代詩論」等